

球部の部長を長く務めていることも彼の生涯で忘れてはならない点であろう。最後の教え子で名選手であった内村祐之を野球部に入れるに際し、厳父内村鑑三が頑固して承諾しないのに懇望を重ね「決して学績を落さないから」と誓い、やっと許可をもらった。こうして内村選手時代が現出した。

大正10年には『戦後の独逸』を独語教科書の出版で知られた郁文堂から出した。四六判、二百頁。第一次大戦後のドイツの主として政治的・社会的状況を、ドイツの新聞や書物から材料を得てまとめたものである。当時はこうした情報も必要とされたが、今日読むには相当に努力がいる。

さて、万次郎は大正11年には一高教授を辞めて文部省督学官になった。これは留学の順番が廻ってこないのにしびれを切らしての転出だったのではあるまいか。翌年9月には早くも文部省から派遣されて学校制度研究のために独英米各国に出張している。そして帰国後は山形高等学校長、第七高等学校造士館長を経て、昭和9年8月大阪外国語学校長に就任した。こうしてかつての独語教師は教育行政官に変わっていった。

昭和17年4月、大阪外国語学校々長を免職となり、東京へ戻った。そして予約していた母校日本中学校長に就任した。が、昭和20年3月の東京大空襲によって当時杉並方南町の自宅は直撃弾を蒙って全屋灰に帰した。21年帰郷し、平戸市西ノ久保の旧家へ戻っていたが、昭和30年9月、財団法人松浦史料博物館が設立され、乞われて初代館長に就任した。「博物館が大体時代物の蒐集所である関係から、館長にも古色を帯びた者をあてることになり、私はその選に入ったのである」と、葉山万次郎談『平戸の対外貿易時代の話』（昭和36年）の中で語っている。

博物館には松浦家の古記録をはじめ、種々の古文書があるので、気の向くままに読んで行くうちに、何か書いて見ようという気になった。そして諸大家の書いた史実や史論を引用して、随筆の様な、物語の様なものが出来たのをまとめたのが『平戸の対外貿易時代の話』である。内容は、戦国時代から江戸初期にかけて平戸における対外貿易の状洗を、葉山家の先祖に関係の深い豊臣家と松浦家の動きとも関連づけながら描いたものである。松浦家第二十五世の道可から法印、泰嶽、宗陽、天祥の五代藩主時代が扱われているが、この時代は、日中間の交渉は一層盛んになり、さらに日本と東南アジア及び西欧との通商関係が平戸において結ばれ、我が国の西欧文化輸入にとって画期的時代であった。万次郎は謙遜しているが、四六判約80頁の小冊子にしてはよくまとまっており、この方面の知識を一通り得るのに適した本である。

葉山万次郎は松浦史料博物館々長に在職のまゝ、昭和35年（1960）10月7日、83歳の生涯を閉じた。墓所は平戸市鏡川町西の久保（^{うしほ}坊）にある。戒名は「獨嘯院憂嶺萬仞居士」である。息女・林三保子氏（船橋市在住）は、父の人格は円満で、淋しがりやであったと語っている。掲出の肖像写真は松浦史料博物館の岡山芳治氏の提供にかかる。

旧五高所蔵のドイツ語学書

熊本大学附属図書館の別館には旧制第五高等学校所蔵の図書が保存されているが、その中には英語・ドイツ語・フランス語など語学関係のものが多量に含まれている。旧制高校では語学

教育に最も力点が置かれ、時間数も今の大学教養課程のそれよりはるかに多く、さながら外国語学校の観があった。五高の蔵書に語学書が多いのはそうした事情を反映している。ドイツ語関係では、明治・大正時代に我が国で使用された教科書や参考書の主なものは大体揃っている。これは特筆すべきことだ。この方面で最も多く所蔵しているのは国会図書館だが、古いドイツ語の教科書類を熊大ほど多く保存している大学図書館は他に余りないのではないかと思う。特に明治時代に使用された洋書に貴重なものが多い。以下概略を紹介しよう。

語学の勉強に欠かせないのは辞書であり、いかに辞書を上手に活用するかに上達の秘訣がある。そのため日本でも明治から今日にいたるまで多くのドイツ語の辞書が作られて来た。日本の独和辞書の歴史は、独英の複数の辞書を底本とし見出し語・綴字・分節法・発音・語義解説・語法・用例等の情報を全部ないし殆どを依存し、訳語や訳述の様式を先行の独和辞書に仰ぐ、といった編集方法が普通である。明治10年代以後の独和辞書にその底本として使われた原書が殆ど揃っている。例えば明治を代表する辞書の一つである福見尚賢・小栗栖香平編『独和字典大全』（初版・明治18年、国文社）の序文には「ホフマン、ハイゼ、ウェーベルを原書として、ウェーニヒ、ブロックハウス、マイエル等を参考にした」とあるが、それらのドイツ語辞書はHeyneやSandersの辞書と共に全部揃っている。ほかにアドラー独英字典があり、ホフマン他国語字典もある。

最も多量に保存されているのは各種の読本（リーダー）である。明治前期にはまだ日本人が編集したものが稀であったので、ドイツから輸入したものを用いた。ヘステル（正しくはヘステルス）読本とボック読本がその代表である。いずれも第一から第四読本まであり、第一読本はFibelと称し、先ずこれによって綴字・発音・習字を徹底的に学んだ。概して明治時代にドイツ語を学んだ日本人にはドイツ人と見紛うような見事な筆跡の独文を書く人が少なくないが、これはドイツ文字・ラテン文字の習字に時間を懸けて練習したからであろう。ヘステル、ボック両読本は元来ドイツの小学校用教科書で、動植物や鉱物など事物についての短かい読章を収めたものである。この後に導入されたリューベン・ナッケ読本（全5巻）も大体同様である。明治20年前後にはこれら初級読本に代わってHopf・Poulsiek、Kehrein、Boneなどのやや程度の高い諸読本が登場する。いずれもいかにもドイツ的と思わせる装幀の重量感のある本であるが、分厚いものだけに教科書としては余り普及せず、むしろ教師の間で多く使われたようだ。明治30年代に至るまで高等学校をはじめ諸校で最も広く用いられたのはエンゲリン読本（全4巻）で、五高生もこれによって学んだことは同書が多数保存されていることから分かる。このエンゲリン読本と並んで明治中期から後期にかけて普及したリーダーに、英国出版のブッフハイム編『近代ドイツ読本』（Buchheim: Modern German Reader）がある。2巻から成り、巻末に英語による注が付いているのが特徴で、東京帝国大学の雇教師E. ハウスクネヒトがドイツ語の授業で用いて以来、その優秀性が知られるようになった。内容もさることながら、分量も適切で、その上、新書判に近い大きさだったので携帯に便利であったことも該書が普及した理由だろう。ちなみに、同じ編者によるドイツ古典文学の一つ『ハイネ散文集』（Heines Prosa）が約50冊ほど保存されており、どれもハルツ紀行のところには多くの書入れが見られるのは興味深い。ハイネ好きの教師が指定図書として買い揃え、生徒たちに講義したものであろう。明治末から大正初期にかけてクローン『ドイツ日常生活』（Der Kleine Deutsche）

や Berlitz、Worman、Alge 等の読本が登場した。Worman 読本は特に陸軍幼年学校で好んで用いられたが、五高でも使われた。なお、明治10年代からの20年代にかけてドイツ語の教科書として万国史や地理書が用いられたが、その代表のウェルテル万国史とウェーベル万国史及びダニエルとサイドリッツの地理書も揃っていることを付記しておきたい。

文法書では先ずシェーフエル独逸文典が挙げられる。既に明治5、6年ごろから使われているが、盛行を見たのは明治10年代で、ヘステル読本と共にドイツ語教科書の2本柱であった。初級文法書でヘステルの第一を終えると直ちにこれに就いて学ぶのが普通であった。品詞論と文章論から成り、説明が懇切で、例文も多く初めてドイツ語を学ぶ者には最適であった。原書、翻刻本とも行われたが、翻訳も各種出ている。シェーフエル文典より詳しいのがハイゼ文典である。これには大文典 (Leitfaden) と小文典 (Schulgrammatik) があり、森鷗外は後者で学んでいる。明治20年代になると、米国のF. コンフォートの German Course 及び、これに少し遅れて導入された E・オットーの独英会話文法など英文の文法書が高等学校を中心に広く用いられるようになった。ほかに五高では Wilmanns や Krause の文法書も教科書として用いられた。書簡文範 (Briefsteller) では有名な Rammeler や Campe のものがある。東京外国語学校その他で教えた E・ハリールには Bausteine とか Lehrprobe と題する中級リーダーがある。

洋書に比べると日本のドイツ語学者の編著は少ないが、主なものに大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎の『独逸文法教科書』(三太郎文法として親しまれ大正中中期まで使われた名著)、同じ編者の『独逸語入門』『独文読本』『新撰独逸名家詩文抄』のほか、崎山元吉『独逸学捷径』、水野繁太郎『独逸語自修書』、国吉直蔵『簡明独逸文典』等がある。筆者の注意をひいたのは、独逸語学校蔵版の『独逸読本』(全3巻)『独逸文典』『精撰独逸読本』(明治27~30年)が著者・高橋金一郎によって寄贈されていることだ。高橋は専門の医学よりも衆目の見るところドイツ語学に優れていた人である。『独逸文典』は日本人の手になる最初の詳しい文法書で詞論と文論から成り、『独逸読本』は前記 Buchheim 読本の影響を受けているが、今見ても立派なものだ。独逸語学校は明治19年に東京・本郷に開設された私立のドイツ語学校で、若き日の高橋や土肥慶蔵、藤代禎輔、登張竹風(信一郎)などが教えたところである。

五高のドイツ語教師たちの著作も勿論ある。初代のドイツ語教授を務めた賀来熊次郎の『独逸語学階梯』『独逸語学階梯案内』『Schillers Historische Skizzen』をはじめ、後年我が国のドイツ語界に大きい足跡を印した青木昌吉の『邦語独逸文典』『邦語独逸文章論』(いずれも博文館・帝国百科全書の中)もある。わざわざ「邦語」と断っているのは奇異に思われるかも知れないが、当時は洋書を用いる場合が多かったのである。ほかに、後に広高陸軍幼年学校教授になった三谷金女三の『独和二対实用会話篇』、五高教授を辞め初代福島市長に転身した二宮哲三の『独逸文典原理』、新教神学校の出身で、強烈な個性で知られ、後に一高教授になった丸山通一の『独逸音声学大意』(皇国学生必読)などもある。五高ドイツ語科のシンボリック的存在だった小島伊佐美も文法書や読本を数種残している。第五高等学校龍南会編『新撰独文読本』などもある。

以上明治時代の蔵書を中心に紹介した。これらは今では顧みる人もなく埃をかぶっているが、それでは惜しい。現在でも教育研究の資料として活用できるはずだ。とにかく、こうした重厚

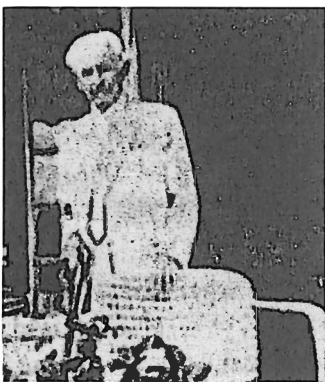
でオーソドックスなドイツ語の教科書をはじめ辞書や参考書を多数所蔵しているのは熊本大学の誇りだ。五高の遺産は決して漱石やハーンだけではない。

七高教師クレスラー

七高造士館には発足時に二人の傭外国人教師がおり、共に日本学者であった。一人はマードックという英国人で、主に日本史を研究し、もう一人はグラマツキーというドイツ人で古今集の独訳などの業績のある人である。マードックは一高時代に漱石に英語を教えた人としても知られている。さて、この二人に遅れること7年、明治41年（1908）に独語とラテン語の教師として七高に赴任したオスカル・クレスラー（Oskar Kressler）も後年有力な日本学者となった人である。特に、現在ドイツにおける日本研究の一拠点となっているボン大学の初代日本学の教授に就任し、その昂揚に尽くした功績は記憶されるべきである。

最初に、現在ボン大学に保存されているクレスラーの人事記録に収められている自筆の履歴書（Lebenslauf）を紹介しよう。これはクレスラーがボン大学の員外教授に就任する際に作成されたものである。

「私アウグスト・エドアルト・オスカル・クレスラーは、1876年4月16日、当時郵便書記官で後に郵政局長となった父オスカル・クレスラーの息子としてコンスタンツ（バーデン州）に生まれた。故郷の町で1884年まで小学校に通い、次いで1884年から87年までアーヘンの小学校及びギムナジウム、1887年から90年までコルマルのリツェウム（ギムナジウムの上級学年）、そして1890年から96年までハルツ山麓のヴェルニゲローデのギムナジウムにそれぞれ通学し、1896年同地でギムナジウム卒業証書を授与された。1896から1897年まで2学期ライプツィヒ大学で学び（東洋学・古典文献学・哲学）、1896年の夏学期はジュネーブ大学に学び、1897年から1904年までシュトラースブルク大学にあり、同地で学位（サンスクリット・トルコ語・宗教哲学）を得た。1904年から1906年までフランクフルト・アム・マインの某家の家庭教師を勤めた。その後再びシュトラースブルク大学に戻り、1908年5月8日に高等教職の国家試験（上級フランス語・中級ドイツ語・英語）に合格した。同時に（1907年9月から1908年の4月



クレスラー

まで）シュトラースブルクのサント・ヨハン実科高等学校の学術臨時教員になった。1908年9月以来、高等学校教員（独語・ラテン語）及び1923年から1929年までは大学講師（独語・ギリシャ語）として日本政府（鹿児島及び浦和の高等学校、東京帝国大学、法政大学、陸軍士官学校）に雇用された。1929年秋より1932年春までボン大学東洋語科日本語講師。1932年2月20日同大学の日本学教授資格を取得、1933・34年の冬学期以来、日本学の講師を依頼された。1908年以来、既婚」

この履歴書によると、クレスラーが日本語や日本文学に興味を持ち、学び始めたのは、七高の教師となって来日してからの